

(1) 言語活動を充実させる授業構想の4つのステップ

各教科の目標の実現に向けて、言語活動を充実させるには、次のステップで授業を構想していくことが考えられます。

4つのステップ

1 生徒に付けたい力を明確にする

1 生徒に付けたい力を明確にする

各教科の学習指導要領の目標や内容等のどれを取り上げて指導するのかを明確にしておくことが重要です。

各単元の各時間ごとの授業において、観点別評価（4観点）を考慮して、どんな力を生徒に付けたいのかを明確にしておかなければなりません。そのためには、評価規準（具体的な生徒の姿で示したもの）を作成することを意識しましょう。

2 付けたい力にふさわしい言語活動を選定する

2 付けたい力にふさわしい言語活動を選定する

1で明確にした付けたい力を確実に育成できる言語活動を選定することが重要です。

各言語活動がどんな特徴をもち（P16, 17参照）、指導過程にどう位置付けることが最適なのかを明らかにしておかなければなりません。

3 生徒の課題解決の過程に言語活動を取り入れた学習活動を位置付ける

3 生徒の課題解決の過程に言語活動を取り入れた学習活動を位置付ける

各教科等の特質に応じて、生徒が自ら課題を見付け追究していく過程に言語活動を適切に位置付けることが重要です。

単に教師の指示通りに行うだけだったり、主体的な思考や判断を伴わない活動となってははいけません。

4 思考や判断を促す発問や指示を準備する

4 思考や判断を促す発問や指示を準備する

何についてどう思考し、どう表現するかなどを、生徒自らが意識できるようにするための具体的な発問や指示の準備をしておくことが重要です。

ポイントが絞られていない発問（例えば「何故そうなるのでしょうか」）や概括的な指示（例えば「意見を交流させましょう」「整理しましょう」）だけではなく、何をどう思考・判断し表現するかを生徒が的確に捉え、充実した言語活動となるように、発問や指示を準備しておかなければなりません。例えば、「□□となるのは何故なのかを〇〇の部分と△△の部分と比較して考えてみましょう」や「まず、自分の考えを1人ずつ班員に発表します。その後、どうすれば課題〇〇が解決できるかを話し合い、班の意見としてまとめましょう」などを準備するとよいでしょう。

(2) 言語活動を充実させるポイント

各教科・科目等の目標の実現に向けて、言語活動を充実させるには、次の6つのポイントに留意して授業を行うことが大切です。



- 1 具体的な評価規準を作成しておく
- 2 言語活動が充実する教材を準備する
- 3 生徒に思考・判断させる場面を設定する
- 4 自己内の活動を取り入れる
- 5 他者との活動を取り入れる
- 6 工夫した発問を準備する

1 具体的な評価規準を作成しておく

言語活動を取り入れた授業を構想する際、評価規準を作成することによって、目指す生徒の姿が明らかとなり、何をどのように指導すればよいか、どんな発問や指示を行えばよいかを明確にすることができます。また、この評価規準を通して、生徒は学習のめあてや学習の重点を明確に知ることができます。学習後は、教師の評価や自己評価等を通して、今後どのような点に注意して学習すべきかを考えることができます。他方教師にとっては、評価規準を基に生徒の達成状況を確認することで、自分の授業を振り返ることができ、授業改善へとつながります。

2 言語活動が充実する教材を準備する

これまで用いてきた教材に加えて、次のような自作教材を準備するとよいでしょう。

- ・様々な考えを出し合える教材
- ・生徒の意見が割れる教材
- ・生徒につまずきを与え、そこから解決策を見出させる教材
- ・比較や分類などを通して解決策を見出させる教材
- ・説明に工夫を要する教材

3 生徒に思考・判断させる場面を設定する

教えなければならない事柄が多いため、ついつい教師が多くを説明し、生徒にとっては、「ふーん」「そうなんだ」とわかったつもりになっていることが多く、生きた知識になっていない傾向にあります。生徒に思考させ「なるほど、そうだったのか」という発見につなげることが大切です。

4 自己内の活動を取り入れる

発問や指示をし、生徒に答えさせたり考えさせたりする場合、待つということが長く感じられるものですが、生徒が読んだり書いたりして思考したものをまとめるために、ある程度の時間を確保することが大切です。これが自己内の活動になります。

5 他者との活動を取り入れる

P14で示したように、「自己内の活動」で構築した考えは、他者へ話したり他者から聞いたりする「他者との活動」を通して、広がったり深まったりします。また、課題に対する解決方法などの新たな考えを創り出すことにもつながります。したがって、ペアやグループで協議（討議）させることが重要です。

協議させる際のポイントは次のとおりです。

- ・事前に生徒の反応や発言などを十分に予想しておく
- ・協議を促進するための適切な支援をおこなう
- ・思考する部分だけを重点的に協議させる
- ・協議に適した教材を用意する
- ・グループは4人構成が望ましい

また、様々な手法（ブレインストーミング、KJ法等）を用いることも効果的です。

6 工夫した発問を準備する

生徒の思考を深めるためには、工夫した発問を準備しておくことが大切です。

例えば、次のような発問が考えられます。

- ・答えが複数考えられる発問
- ・意見が割れ思考が広がる発問
- ・日常生活との比較や関連などを考えさせる発問
- ・既習の知識と比較し共通点や相違点を見付けさせ、関連付けなどを促す発問
- ・授業中には敢えて解答や解説を行わない発問

また、こういったタイミングで発問したらよいかも検討しておきましょう。

(3) 評価規準の設定と評価方法

各教科・科目等の目標を達成するため、すなわち思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、言語活動を充実させる必要があります。そのために、P21の1において、「具体的な評価規準を作成する」ことの重要性について述べました。

具体的な評価規準を作成し、生徒の達成状況を的確に評価するには、以下の3つの点に留意することが大切です。

1 評価規準を生徒の具体的な姿で設定する

評価規準は、学習指導のねらい（指導目標）が生徒の学習状況として実現されたとはどのような状態になっているかを「生徒の姿」で具体的に表したものです。

その実現状況の評価は、次のように区別して行います。

A：「十分満足できる」状況と判断されるもの

B：「おおむね満足できる」状況と判断されるもの

C：「努力を要する」状況と判断されるもの

2 「思考・判断・表現」を適切に評価する

評価に当たっては、授業中の発表や発言（観察）、テスト、ノート、レポート、ワークシート、作品、質問紙、学習カード、生徒との対話などの活用が考えられます。これらの中から、生徒の達成状況を的確に評価できる方法を選択することが必要です。また、生徒による自己評価や生徒同士の相互評価を取り入れることも考えられます。

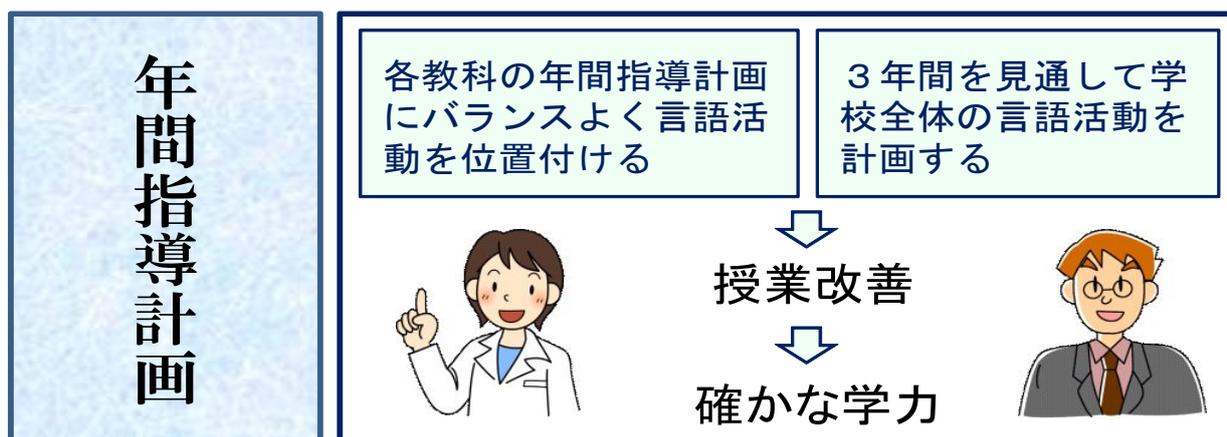
頭の中で思考・判断したことは、声に出すか、行動で示すか、文字等で書いて表現しなければ見取ることができません。よって、「思考・判断・表現」を評価するには、授業中の生徒の様子を観察する（生徒の発言や行動に留意する）とともにワークシート等を活用するとよいでしょう。

3 評価がCの生徒への支援を行う

評価を行った結果、「努力を要する」状況の生徒がいる場合は、その生徒への支援を行うとともに、その後の学習指導の工夫改善に生かし、生徒一人一人の学習の定着に結びつけることが重要です。

(4) 年間指導計画への位置付け

年間指導計画を検討する際、各教科が目標とする資質や能力が生徒に身に付くように各単元（題材）において、4観点（関心・意欲・態度、思考・判断・表現、技能、知識・理解）をどこで育成するかを明確にします。その際、思考力・判断力・表現力等の育成をねらう箇所には、適切に言語活動を位置付けることが大切です。



1 年間指導計画に位置付ける重要性

言語活動の計画は、年間指導計画等を用いて作成していることと思います。しかし、単元（題材）ごとの観点別評価規準や言語活動については、いかがでしょうか。

年間指導計画の単元（題材）ごとに言語活動や観点別評価規準を記述する欄を設けてみてください。このことによって、これまでの授業スタイル（知識や技能の習得を目標とする授業）を、知識や技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視した授業へ変えることが可能となります。したがって、年間指導計画の単元（題材）ごとに言語活動や観点別評価規準を位置付けることは、今求められている授業改善への第一歩であり、学校全体で推進することが重要です。

2 位置付ける際のポイント

言語活動を年間指導計画に位置付ける際は、各単元（題材）ごとに計画的に位置付けます。また、どんな目的でどんな言語活動をどこに位置付けると効果的かを十分に検討することが大切です。よくある失敗例としては、「言語活動には生徒はよく取り組んでいたが、十分に本時のねらいを達成することができなかった。」などが挙げられます。

生徒にどんな力を付けさせたいのか、そのために適切な言語活動はどんなものなのか、最も生徒に考えさせたい（発見させたい、気付かせたい）ことは何なのかを明らかにすることが大切です。